児島さんのこと

小　黒　昌　文
（フランス語）

個人研究室がならぶ６階の廊下でのことだったか。それとも閉まりかけのエレベーターに慌ただしく乗り込んだときのことだったのか。赴任したばかりで所在なさげにしていた私に、穏やかな調子で声をかけてくださったのが児島さんだった。

おなじ仕事場に身をおいて２ヶ月あまり。直接に言葉を交わすことができた機会は、じつは数えるほどしかない。教場に向かう道すがら。若手のみなさんとご一緒した食事の場。部門が開いてくださった歓迎会でのひととき。何気ないやり取りのなかにも、相手を思いやる気持ちが滲んでいた。

間の抜けた私がトイレに忘れた鍵束を、児島さんが拾ってくださったことがある。野宿をまぬがれたお礼にと、なかば強引に受け取って頂いたお菓子を眺めながら、学生たちと一緒に食べさせてもらいますね、と微笑まれたのが印象的だった。ご著書をご恵贈くださったときには、控えめなノックとともに研究室まで足を運んでくださった。一冊の書物を手にしたその柔らかな佇まいが、折にふれて想い出される。

喪失感の大きさは、ともに過ごした年月の重なりや築き上げた関係の深さと無縁ではないと思っていた。しかし、訃報に接し、その不在をまえにしたとき、振り返ることのできる想い出の数があまりに限られていることもまた、鋭利な痛みをともなうのだということを教えられた。

むやみな声の大きさや言葉数に頼ることのない誠実さと、物事をやり抜こうとする意志の強さとを感じさせる語り口に惹かれていた。この人の話を聞いてみたい。この人と話をしてみたい。そう思わせる魅力を湛えておられた。いまとなっては、永久にその機会が失われてしまったことが悔やまれてならない。

すべて良書を読むことは、過去にそれを著した最良の人びとと対話をすることである、といわれることがある。いやそうではなく、読書とは、書物にこめられた思想に導かれながら、孤独のうちに自己の内奥と向き合う営みなのだ、といわれることもある。

後戻りすることのできない時間をまえにして、それでも我々にできるのは、児島さんの残された文章に向き合うことであり、そこに指針や刺激を求めつづけることではないか。専門のちがいを問題にすることに意味はない。様々な分野の人間が集まる場において、開かれた精神でそのことを示してくださっていたのが、ほかならぬ児島さんだったはずだ。刻まれた言葉の数々が、その声が、これからもおおくをもたらしてくれるに違いない。

児島さんは、きっとたくさんの人たちにとってそうであったように、束の間の知り合いにしかなり得なかった人間にさえ、そう信じさせるだけのものをお持ちのかただった。